

生きることわざまんだらより

〈内がことわざです。ことわざはみな、庄司和晃先生監修の『子どもことわざ辞典』ことばはともたち』(講談社1999)のものを用いました。(送りがなは少し変えました。ことわざの詳しい意味や使いかたはこの辞典にて調べてください。お友だちの創作ことわざや絵もいっぱいのっている楽しい辞典です。

なあ、みなさん。生きることわざのまんだらですよ。まんだらとは、大切なことをまとめて表すものです。

論理

〈北に近けりや南に遠い〉〈犬が西向きゃ尾は東〉〈雨の降る日は天気が悪い〉〈こわごわははだし〉あたりまえですね。〈右に花さく〉〈大風がふけば桶屋が喜ぶ〉あたりまえとか、無理とか、意外とかの論理。〈右をふめば左が上る〉〈大同小異〉
わがままな論理があります。

〈二度あることは三度ある〉〈三度目の正直〉〈三度目に注意しよう〉。
〈長所は短所〉〈一長一短〉長所もあれば短所もあります。〈過ぎたるは、なお及ばざるがごとく〉

矛盾などをぶくむわがままな論理があります。
〈帯に短し、たすきに長し〉〈針小棒大〉〈中途半端とかおおげさとかの矛盾〉。
〈五十歩百歩〉〈中途半端とかおおげさとかちがいないとかの矛盾〉。

〈月とすっぽん〉〈雲泥の差〉似ているように思ったけれどちがうのです。〈水と油〉別のものなのです。
矛盾などをまじりまな論理。

〈二兎を追う者は一兎をも得ず〉〈あぶりはち取らず〉あれもこれもと欲ばり失敗。〈一挙両得〉〈一石二鳥〉かかみがねをきこきってへる。都合よく得がらえた。

あれもこれもは都合よくへくときと失敗するときはあな。
〈わたりに船〉〈乗りかかった船〉都合のよいとときや行きがかりのとき。
あれもこれもはしついのち都合よくへるのか。

〈大は小をかねる〉〈氷山の一角〉〈大きいものから小さいものを見る〉。〈すめのなみだく〉〈ねじの額〉ほとんちやじやじもせまい。大きいものから小さい

さいものをみるとか、ほんのちよつと、とてもせまい。
以上、たまむねな論理です。よいんぐ。

ご縁

〈ししの子落し〉〈若いときの苦労は買ってでもせよ〉子どもや若いときの苦労は大切なのだ。〈健全なる精神は健全なる身体に宿る〉人はパンのみにて生きるものにあらず。健康な身体も健康な精神も大切だ。子どもや若いときに健康な身体と精神をいへた。

〈三つ子のたましい百まで〉〈すすめ百までおどらわすれず〉人生は子どもどものまです。〈六十の手習い〉〈大器晩成〉年をとって力のつくこともある。子どもどものときにもまる人生も年とって力のつくこともある。

〈自業自得〉〈身から出たさび〉あなたのふだんの生活が悪いのです。

〈氏より育ち〉

最後まで意義のある一生も、いへに子どもや若いときどう育つかが問題。

〈なくて七くせ〉〈宝の持ちぐさわ〉〈芸は身を助く〉自分にあるそれなりの芸を大切に。〈天は二物をあたえず〉〈好きこそ物の上手なれ〉へたは上手のもと〉へたの横好き〉好きならいつかは上手になるのか。〈枯れ木も山のさわい〉好きならそれなりの才能でいざわつか。自分がそれなりに好きな芸をいかに。

子どもや若いときどう育ち、それなりに好きな芸をいかにいかに。

〈かえるの子はかえる〉〈瓜のつるになすびはならぬ〉結局、親と同じような大人になる。〈親の心、子知らず〉〈子を持つて知る親の恩〉子は親にならなければ、親の心がわからない。子は結局、親に似るが、それまで親の心がわからぬ。

〈寝る子は育つ〉〈親ばか子ばか〉〈総領の甚六〉家族とくにはじめの子は甘くなるのかなあ。〈老いては子に従え〉子どもから老人まで家族はほのぼの。

ああ家族。子が親の心を、など、わかっていることもある。

〈天に向ってつばをはく〉〈うそをいえば地獄へ行く〉正直に人を思って生きてはうがいよ。

〈うそから出たまじく〉〈ひょうたんから駒〉じょうだんがほんとうになるじつもある。〈えびでたいをつる〉〈わざわいを転じて福となす〉わざわいが多くても、大きな福が返ることもある。人生には意外な展開もある。

〈四苦八苦〉〈七転八倒〉人生は苦なのです。〈苦あれば楽あり、楽あれば苦あり〉〈楽あれば苦あり、苦あれば楽あり〉苦も楽もある人生。〈上の坂あれば下

り坂ありく〈捨てる神あれば拾う神ありく〉人生は捨てられたり拾われたり良くなったり悪くなったり。人生は苦なのか、楽もあるのか。

苦楽の人生、意外な展開もあるか。

正直に家族や人を思い意外な人生もあるか。

どう育ち家族や人をどう思い意外な人生をひきよせるか。

〈内弁慶〉〈芋の煮えたもこ存じない〉〈亭主の好きな赤烏帽子〉世間を知らない狭い家族のなかのじつ。〈年寄りの冷や水〉〈年寄りと仏壇は置きどころがない〉無理をする年寄りをそまじにもできずあつかいこまることもめ。

親はなくとも子は育つく〈子どもは風の子〉〈負つた子に教えられて浅瀬をわたる〉子どもは意外にしっかりしている。〈子はかすがい〉〈子どものけんかに親が出る〉〈遠くの親類より近くの他人〉家族はみだれながらもなんとか続きます。

〈律義者の子だくさん〉〈親孝行したいじつは親はなくとも子どもと親からなる、家族のあれやこれや。〉親の光は七光りく〈とびがたかを生む〉親が有名か子がすべれているか、そんな親子もある。

家族になんだかんだがあります。

〈知らぬが仏〉

狭い家族などになんだかんだがあっても知らなれていないことがあるかもしれませぬ。

どう育ち家族や人とどうつきあひよりひろい人生をひきよせるか。

〈どらの威を借るきつね〉〈頭かくしてしりかへずくうまく見せかけたつもりでもだめ。〉〈口と腹はちがう〉〈目は口ほどに物をいう〉〈口だけでなく目の表現や別の腹じももある。〉〈先や見せかけよりの目の表現や腹じも。

二度聞いて一度ものいえく二度教えて一度しかれく聞くこと教えることを多くものいうじつしかるじつを少く。〈短気は損気〉〈口はわざわいの門〉

おちついて考えてからしやべったほうがよい。〈丸い卵も切りようで四角く物もいよいよで角が立しく丸いいかたがあるのじ。

おちついて考えよく聞きよく教え丸く言え。

〈たの長談義〉〈鼻くそをわらひうく〉〈わのしり笑い〉自分も同じようなものなのに人をばかにする。〈七たひさがして人をうたがえく〉頭の上のはえを追えくよくしやべるまえに自分で問題がありませんか。

〈物は相談〉〈三人寄れば文殊の知恵〉相談すれば意外な知恵も出るか。

〈人は見かけによらぬもの〉〈鬼の目にも涙〉人は意外にやさしかったり見

かけからわからないところがある。

言いかたによく注意して相談すれば意外な知恵や発見もあるか。

〈飼い犬に手をかまれる〉〈後足で砂をかける〉〈煮え湯を飲ませる〉〈恩をあだで返す〉〈恩や信頼を知らないひどい人もいるもんだ。〉〈うらず口をたたく〉

〈はっても黒豆〉〈負けやまちがいをみとめられない人。〉〈木で鼻をくぐる〉
恩や信頼や現実の社会から孤立してしまう人もいる。

〈ぼつずにくけりゃ袈裟までくく〉〈ひじ鉄砲を食わす〉〈恩や信頼や現実がわからない人ともつきあってさ〉。

目の表現や言いかたに注意しあらゆる人と相談すれば意外な腹づもりの発見や知恵もあるか。

〈目を落す〉〈顔色をうかがう〉〈相手の顔をまともに見ず、顔色をうかがう。〉

〈目くじらを立てる〉〈耳が痛い〉〈なみだをのむ〉〈胸がつぶれる〉〈はらわたがちぎれる〉なみだをのみ、胸がつぶれ、はらわたがちぎれる。〈肝をつぶす〉

〈へそを曲げる〉〈腹の虫がおさまらない〉〈腹やへそがどうにもおちつかない。〉
なみだ、胸、肝、へそ、はらわたの異変。へそが茶をわかす〉からだのなか

が動いています。

顔やからだのなかによる人間関係を。

目や顔や言いかたやからだのなかに注意してあらゆる人と相談し意外な関係を生む。

〈蛇の道は蛇〉〈かにはじりひりにせし穴をほく〉それなりの情報や行動があります。

〈夢食う虫も好き好き〉〈同病相あわれむ〉〈同じ穴のむじな〉〈同じ苦しみ悩みの者どうしとわかりあう。〉
苦しみ悩みや好みはそれぞれ同じ者どうしがわかりあう。

〈一寸の虫にも五分のたましい〉〈さしよひは小粒でもびらりとからい〉
小弱そうでもあなごれない。〉
〈仏の顔も三度〉〈無理は三度〉〈なぶればうさぎも食いつく〉おとなしい人でもがまんの世界というものがあります。〉
窮鼠、ねじをかむ〉

弱い者でも追いつめられたらするや強こ。

〈引かれ者の小唄〉〈まめの歯ぎしり〉弱く負けた者が歯ぎしりしたり小唄をうたったり。

〈苦しいときの神だのみ〉〈いわしの頭も信心から〉〈おぼれる者はわらをもつかむ〉人は何にでもすがることがあります。〉
地獄で仏に会ったよう〉人は何にでもすがり、思わず助けを求めます。

〈ならぬ堪忍するが堪忍〉〈窮すは通ひ〉
ならぬ堪忍のなかから切りぬ

ける道があるか。

すがり、なんとか切りぬけ、それなりに強くもなる。

苦勞や好みを同じ者とうしがわからあい切りぬけていへ。
それそれなりの苦勞や好みや情報や行動がある。

〈単刀直入〉

どんな人ともわたりあい関係を築けるか。

〈鵜の目だかの目〉〈目がな〉〈味をしめる〉好きなものをおさがし見つけ味をしめる。〈ひびきを乗る〉好きなものにより接近する。〈勝負もふらぶ〉矢も盾もたまらず、熱中、没頭。〈一日千秋〉指をへわえる。ああ、待ち遠しい、なにもできない。好きなものへのかかわり。

〈目の中に入れても痛くない〉〈じばに甘える〉甘い関係。

好きなものへのかかわるとか甘い関係とか。

〈八方美人〉〈粋が身を食う〉なまけ者の節句働き。お調子よく遊びがちな人のようです。〈借りてきた猫〉なぜかお調子よくいっしょです。

〈人のうわさをいう〉はかもの味がする。〈うわさをすればかげがさす〉ついというわさ話をしていいるとその人があらわれたりする。〈人の口には戸が立てられぬ〉悪事、千里を走る。〈人のうわさも七十五日〉うわさをくんに悪いこととうわさはとても早くへびるまるがそのうわさは消えもする。うわさとはこんなもの。

〈となりの花は赤〉うわしらについての思いがどうあるか。
うわしらやお調子についてはひとごと。うわらぶ、お調子、好きなものへのかかわり、甘い関係。

〈JUNKのJUNK〉釘をむす。〈齒に衣着せぬ〉異口同音。〈明確に〉なってる。発言。日本社会において明確にみへびるへびる。

〈けんか成敗〉

長いものには巻かれろ。〈むわらぬ神にたたりなし〉強い者こそからわらず、よいいなことにかかわらず、という生きかた。〈寄らば大樹のかけ〉出る。いは打たれる。強い人のもいで目立たないという。〈曲らねば世がわたられぬ〉無理にみへびる。かかわらぬ、目だけだ。正々、好む、うらやましい、うらやましい、うらやましい。かた。

ほんねをかくしても和をもとめる、という社会。

ほんねをかくしよくひびく。はから和をもとめる、という日本社会。

ほんねより甘い和をもとめる日本社会か。

どう育ちどんな人ともどうわたりあいほんねの人生を築けるか。

〈読書百へん、義おのすからめらむ〉門前の小僧、習わぬ経を読む。

ことばをくりかえし聞き読みすることが大切です。〈論語読みの論語知らず〉〈論よ
り証拠〉〈百聞は一見にしかず〉論や百聞より証拠や一見を大切にす。〈机上
の空論〉〈畳の上の水練〉〈京の夢大阪の夢〉現実を知らずに夢をみていてよ
いかい。

現実を知って論語などを理解する。ことばのくりかえしも、現実を知ること
も、大切にす。

〈へたの考え休むにたのしく〉聞かぬは一時のはじ、聞かぬは一生のはじ
へたな考えはやめ、聞かぬべきことばはすく聞かぬことば。

〈馬には乗ってみよ、人には添ってみよ〉あぶない橋も一度はわたれくや
ってみないと、つきあってみないと、ものごとや人のことはわからない。へ
たな鉄砲も数うちや当るくへたでもやってみて、つきあってみて、ものごとや
のことを知る。〈当ってくだけるく〉案ずるより産むがやすく思いきってやっ
てみるのがよい。〈まかぬ種は生えぬ〉やってみなければはじまらない。

やってみてつきあってみて事実を知る。

〈うそも方便〉花よりだんじく 現実を優先する場合もある。〈鬼の居ぬ間に
洗濯〉現実をどうおちつかせるか。

〈ねじにかつおぶし〉ねじを追うより魚をのけよ 必然を思い根本を正せ。
事実を知り現実の必然をどうおちつかせるか。

ことばも大切にす、現実をおちつかせることも大切にす。

〈名物にうまいものなし〉はやりものはすたりもの 有名だから良いとは
かぎらぬ。〈羊頭狗肉〉絵にかいたもちく 仏作ってたましい入れずく 山高
きがゆえにたつとからずく たちだけよく実質がおろそかになっていませんか。
かたちとか有名とかでなく実質が大切。

ことばも大切にす、現実や実質を大切にす。

〈一期一会〉情けは人のためならず 人生をかけた出会いと情けがまわる
社会。〈物いへばくちびる寒し秋の風〉実るほど頭の下る稲穂かな 社会の情
けと出会いが深くわかるあなたにかい腰の低い人。

〈親しき仲にも礼儀あり〉礼も過ぐれば無礼になる 自然な礼儀が大切だ。

〈類は友を呼ぶ〉朱に交れば赤くなるく 仲間つきあいをするか。〈魚心
あれば水心〉水を得た魚 水と魚のよじりしつりした関係。自然な礼儀の
あるしつりした仲間つきあいを。

〈あばたもえくぼ〉文はやりたし書く手は持たず ほれてしまつてどうし
よう。〈縁は異なるもの味なもの〉袖ふりあうも他生の縁 縁や出会いの不思議
さを大切に。〈牛に引かれて善光寺参る〉旅は道連れ世は情けく 旅のはじは
かきすてく 旅で助けあひつりもあはれはじをかきすてつりもある。旅からは恋

まで縁の不思議さを想う。〈李下にかんむりを正さず〉情けの縁をめぐらすわ
かりやすい礼儀ある仲間へ。〉

〈人を見て法を説け〉〈釈迦の説法〉おたがいの理解力を知り必要な話をす
る。〈馬の耳に念仏〉〈ぶたに真珠〉〈ねこに小判〉価値や意義がわからぬ者に
あたえようとす。〈手前みそ〉〈じまんは知恵の行き止り〉〈じまんもよいがそ
れで行き止ることもある。〉能あるたかはつめをかくすくすべれた人は必要以上
にじまんしない。

価値や意義がわかりあうよしかびらばあたえあう。

正直は一生の宝。〉〉さしきほじほじの始り。やはり正直がよい。

〈湯しても盗泉の水を飲まず〉こまってもなるべく正直がよい。〉立つ鳥あと
をこたさずくなるべく正直に立ち去るときはきれごと。

価値や意義や情けの縁を正直にわかちやすくめへいす。

息が合う〉〉腹を割る〉〉ひびを交える〉竹馬の友〉息が合い、ひびを交
え、腹を割るような関係。〉風の便りくなんとなくなめらかにつながる関係。

〉以心伝心〉虫が知らせる〉体内や表情からなんとなくわかる。〉気は心

〉心にかける〉相手のことを思い心配する。〉心が洗われる〉こころがなめ
らかにつながる。〉心頭を滅却すれば火もまたすしくなめらかなこころ
つづつながっていく。

〉杞憂〉〉一喜一憂〉臨機応変〉よいけいなうれいをもたずそのときそのとき
に対応していく。〉隔靴搔痒〉かゆいとこころに手がとびくかゆいとこころに手
がとどいたり、とどかなかつたり。

世の中になめらかにつながる対応していく。

世の中とのなめらかな縁をわかちやすくめへらしたい。

〉人のふり見てわがふり直せ〉わが身をつねって人の痛さを知れ〉人の身
になり人と比べて自分がまよともになっていく。〉玉みががざれば光なく人の身
になり人と比べて自分を玉へみがいでいく。

〉念には念を入れよ〉石橋をたいてわたる〉せいては事を仕損ずる〉三
べんまわってたばこしよくあへつでも慎重にひらかかり。〉備えあればう
れいなくあくまでも慎重に備えてかひひらひらかかか。

〉負けるが勝ち〉損して得取る〉負けたら損してもあつて勝ったら得する
じじがぬ。

のちのちの成功に慎重に備え人のなかの自分をみがいでいへ。

〉舌を巻く〉〉頭が下る〉〉一目置く〉尊敬、感謝、感心。〉目が高いくすべ
れいて尊敬できる。

〉鼻が高いく〉自画自賛〉じまるとしてじま。

〉うでが上がる　〉うでをさげる　〉うでを上げる　〉うでを上げて上げる　〉肩をならべる
 だれかと肩をならべろ　〉うでをさげろ　〉うでを上げて上げて上げる　〉肩をならべる
 すべれてしまふできる状態　〉まらなうで　〉まらなうで　〉まらなうで　〉まらなうで　〉まらなうで
 〉しールをし　〉水をめける　〉山を越す　〉ものごとや競争の進み　〉あ
 〉腹を決める　〉足が地につく　〉足が地につき腹を決める　〉ものごとや競争を
 〉づ着実に進めるか。
 〉目をつける　〉的を射る　〉目をつけた射る。　〉手を打つ　〉手を回す　〉手を
 を広げる　〉手を打ち、手を回り、手を広げてこゝろ。　〉目をつけるから手を広げる
 ま。　〉手を切る　〉目をつけるからうづつ手をひなぐかま。　〉目をつけるから手を広げる
 〉一網打尽　〉火ぶたを切る　〉一網打尽、火ぶたを切るか。
 ものごとやただたかいをどう進めるか。
 成功にどう備えるか。
 世の中でのなめらかな縁をめぐるし成功に備える。
 ことばも大切に　〉現実とのなめらかな縁にて成功に備える。
 〉顔が利く　〉顔が広い　〉顔が利き、顔が広い。　〉顔がさげる　〉顔にどろ
 をぬる　〉顔がさげれたり、どろをぬられたり。　〉顔を大切に日本社会か。　〉口
 がかたい　〉口がさげる　〉口が、かたいか、さげるか。　〉口が重い　〉口が軽い　〉
 あまりしゃべらないか、ひみつまでしゃべるか。　〉しゃべらない口か、ひみつを
 まもれる口か。　〉顔とひみつを大切に社会か。
 〉鬼も十八、番茶も出花　〉夜目遠目笠の内　〉女性はどういうときに美し
 く見えるか。　〉十人十色　〉人にはそれぞれ異なる面がある。　〉社会にあるさまざまな顔。
 〉お茶をこす　〉油を売る　〉時間をさげる　〉その場をさる　〉かしてさる。　〉の
 ともと過ぎれば熱さをわすれる　〉くくく　〉ものさる　〉現実にまな　〉の
 たりわすれたりする。　〉あは野となれば山となれ　〉だらしないこころの人も
 〉No。

〉大げろしきを広げる　〉逃した魚は大きい　〉実際より大げろ　〉言ってしま
 うことがある。　〉一事が万事　〉社会には問題な人もいます。
 〉かへに耳ありし　〉目あり　〉付和雷同　〉船頭多　〉船山のほろ
 社会が　〉社会が　〉社会が　〉社会が　〉社会が　〉社会が　〉社会が　〉社会が　〉社会が
 社会に問題な人が多く　〉社会が　〉社会が　〉社会が　〉社会が　〉社会が　〉社会が　〉社会が
 社会にさまざまな顔があり　〉社会が　〉社会が　〉社会が　〉社会が　〉社会が　〉社会が　〉社会が
 〉呉越同舟　〉犬猿の仲　〉犬猿の仲も呉越同舟も。　〉社会のさまざまな顔が
 まとまらないとき　〉まよふ　〉まよふ　〉まよふ　〉まよふ　〉まよふ　〉まよふ　〉まよふ　〉まよふ

んとか使える。〈ほかがあれば〉そのじつが引き立つくばかも使いつつのも引き立つ。〈馬子にも衣装〉ほかも馬子もいつつもそれなりに引き立てよ。一般人も先導者もそれなりに引き立てよ。

一般人と先導者とか社会のさまさまな顔がどうまとまるのか。社会において顔と顔とのなめらかなほんねの縁をどう築いていけるか。そこ、

せんもんか 専門家

〈一年の計は元旦にあり〉〈来年のことをいえば鬼がわらう〉元旦という節目を大切にしよう。〈光陰矢のじゆつ〉すべて過ぎる年月において元旦という節目を大切にす。

〈失敗は成功のもと〉〈他山の石〉自分や人の失敗を成功につなげよ。

〈流れる水はへびりず〉〈桃栗三年、柿八年〉すべての道はローマに通ずく自然のように、大都市のようじゆまりず、あせりず、さまさまな道を考える。元旦を節目に、じゆまりず、あせりず、失敗を成功へ、さまさまな道を考える。

〈ローマは一日にして成らず〉〈千里の道も一歩より起る〉大きな計画を立て少しずつ行え。〈急がば回れ〉〈傍目八目〉ひろい視野から着実に動け。

〈葦の髄から天井を見る〉〈針の穴から天をのぞく〉〈井の中のかわず大海を知らず〉あなたの視野は狭くありませんか。〈木を見て森を見ず〉狭い視野にとらわれていませんか。視野の狭さを反省して着実に動く。

〈木によって魚を求む〉〈木に竹を接ぐ〉方法に問題あり。〈わら干本あつても柱にはならぬ〉〈月夜にちゆうちんくうまへいかなかつたのじゃまだつたり。〉

〈弘法、筆を選ばず〉〈へたの道具調へ〉道具じゆらわれるのは名人でない。方法や道具と上手につきあえ。

〈油断大敵〉〈浅き川も深くわたれ〉〈転ばぬ先のつえ〉油断せずじゆうぶんじゆうぶん注意し準備しよう。〈どろぼうを捕えてなわをなう〉事前に注意し準備しよう。

〈早起きは三文の徳〉〈時は金なり〉時間や早起きを大切にしよう。〈はじめければ終りよし〉時間や何ものじゆのはじめや一日のはじめを大切にしよう。時間を大切に事前じゆうぶん注意し準備しよう。

時間を大切に視野をひろく着実な道をたどる。

〈一朝一夕〉〈三日ぼつず〉〈前代未聞〉短い時間や時間をこえたじゆうぶん時間を大切にすさまさまな道を着実にたどる。

五里霧中く一丈先はやみく先がみえませんが、悪いことは重なるく弱
り目にたたり目くなぜか悪いことばかり。後悔先に立たずくあとの祭りく終
つてしまつてからではどうしようもない。先がみえず、うまくいかないことも
ありましよう。

たなからぼたもちく残りものには福があるく思わす得することもある。
おこる平家は久しからずく弱肉強食く厳しい世の中。はだか物落
すためしなしくあしたはあしたの風がふく心配の種のない生活もよい。ど
うせ厳しい世の中、心配の種をなくすのもよい。

人間の予想や願いと別世の中、心配の種をなくすのもよい。

地震、かみなり、火事、おやじく果報は寝て待てくこわい世の中、幸運
は寝て待つ。こわいもの見たさく当るも八卦当らぬも八卦くこわい不思議に
関心あり。こわい不思議な世の中、幸運は冥想して待つ。

人間には不思議な世の中、心配の種をなくし幸運を冥想して待つ。

天災はわすれたころにやってくるく冬来たりなは春遠かりく暑さ寒さ
も彼岸までく厳しい季節もやがて去る。待てば海路の日和ありく得手に帆を揚
げるく良い風を待つて進む。良い季節や良い風を待ちましよう。秋の日はつ
るべ落しく朝焼けは雨、夕焼けは晴れく太陽の光を知る。季節・風・太陽・大地
にまかせる生活。

住めば都く

においまつたけ、味しめじく薬より養生く薬も過ぎれば毒となるく薬
に頼りすぎるな。ふくは食いたし命は惜しく良薬は口に苦く口を刺激
するものもとってみるか。食物や薬をどうするか。

病は氣からくわらいは人の薬くわらう門には福きたるくわらいは健康
や福のもとです。腹八分目に医者いらすく茶腹も一時くひだるときはま
すいものなしく腹をどうととのえるか。からすの行水くわらい、腹をととの
え、湯水をつかう。わらい、食物、薬、湯水。

自然にまかせ、どうわらい、食べ、住むか。

木もと竹うらく自然を知り自然にまかせ、どうわらい、食べ、住むか。
時間を大切に自然にまかせたわらいの生活の道をたぎる。

雨降って地固まるく雨後のたけのこく聞いて極楽、見て地獄く火のな
いところけむりは立たぬく大山鳴動してねずみ一ひきくなにかが起きてい
るのか、たいしたことはなかったのか。なにか起きているか。落ちついたか。
ひどいか。

対岸の火事くきのうは人の身、今日は我が身く自分に関係ないことと言
っておられるか。灯台もと暗く自分にも関係すべしと思つて、注意すめ。や

なぎの下のどじょうくなが起きているか。自分でどう関係しているか。

〈やぶから棒〉〈寝耳に水〉とつせん、思いもかけず。〈ほとと豆鉄砲〉〈目を丸くする〉おどひきです。〈田ぎりだがう〉〈言語道断〉〈二の句がつけない〉ことばにならない、ことばがうっつかないほど、ひどい、あきれた。おどろき、あきれた、信じられない。とつせん、あきれた、ちょっとわからない。

〈まゆつば〉〈半信半疑〉ほんとうかどうか。〈二の足をぶむ〉確信なくためらう。〈歯が立たない〉〈手も足も出ない〉〈うちがあかない〉どしたらよいかまりました。〈一か八か〉〈薄氷をぶむ〉思いつくあぶないかもしれないが、運にまかせてやってみる。どしたらよいか確信をもてないのだが。

〈手をこまぬく〉〈ない知恵をしぼる〉〈物は考えよう〉なんとか考えてみるか。それなりに考えてみるか。

さて、どうしたものか。ななが起きているか。自分はどしたものが。

〈馬脚をあらわす〉〈竜頭蛇尾〉どつもほんものでありません。

〈頭でっかちしりしぼみ〉〈やなぎに風〉〈かえるの面に水〉〈平気でやわらかく対応〉〈ぬかに釘〉〈豆腐にかすがい〉〈のれんに腕押し〉どつも手ごたえがありません。ふわりふわり手ごたえなし。〈さじを投げる〉どつも方法や手ごたえがない。どつにも方法や手ごたえや持続性がない。どつもともに相手とできません。

ななが起きているか。自分がどつかわるか。

長い時間においてななが起きているか。自然にまかせたわらいの生活の道をたづねる。

〈かめの甲より年の劫〉〈年寄り家の宝〉〈長年の経験〉いっものは大切。

〈ちりも積れば山となる〉〈長年の積み重ね〉いっものが大切。

〈不言実行〉〈いっはやす〉、おこなうはかたし〈沈黙は金〉〈理屈をこねず、なすべきことを実行せよ〉〈初心わするべからず〉〈板に付く〉〈習うより慣れよ〉むかしとったきねづか〈仕事などに慣れる〉いっまでもおどろえない。初心のままにただ実行しおとろえない技能を得る。

〈もちはもち屋〉ただ実行を積み重ねた専門家を尊重する。

〈かっぱの川流れ〉〈さびるも木から落ちぬ〉〈上手の手から水がもれる〉〈弘法にも筆の誤り〉達人にも失敗はある。〈紺屋の白ばかま〉〈医者の不養生〉自分〈のことはわすれる〉専門家。〈なんでもこい〉に名人なし〈欠けのない名人や達人や専門家〉いっのはいない。

ただ実行を積み重ねた欠けもある専門家を尊重する。

〈思う念力、岩をも通す〉〈石の上にも三年〉いっか願いはかなうものです。

〈心機一転〉〈背に腹はかえられぬ〉腹からの決断。いっか腹からの願いがか

なう。〈鬼に金棒〉いつか腹からの願いがかなうと強くかませる。

〈先んずれば人を制す〉〈コロンブスの卵〉先に思いつき行動することが大切。新しい腹からの願いがいつかかなうと強くかませ行動する。

〈雨だれ石をうがつ〉〈七転び八起き〉とことん努力せよ。〈虎穴に入らずんば虎子を得ず〉〈物はためし〉おそれずにやってみよう。やってみる。そしてとことん努力する。〈犬も歩けば棒に当る〉

〈るりもほりも照せば光る〉〈つめのあかをせんじて飲む〉目立つすべれた人にあやかりたいな。〈快刀乱麻を断つ〉〈一を聞いて十を知る〉すぐに問題を解決する人もいる。すぐに解決するすべれた人にあこがれる。ぶつかり努力し解決する人にあこがれる。

〈月にむら雲、花に風〉〈好事、魔多し〉良いこと好いことにはじゃまが入りやすいなあ。

努力と解決の人にあこがれていければいい、というわけでもない。

努力と解決の人にあこがれるのみでなく、自分の腹からの願いがかなうものとして行動する。

ただ実行を積み重ねた専門家を尊重しつつ自分も腹からの願いがかなうものとして行動する。

〈起死回生〉〈九死に一生を得る〉危ういのちをとらもどした。〈危機一髪〉〈前門のとら、後門のおおかみ〉危機です。〈泣き面に蜂〉危機にまつわることはあれこれです。〈君子、危うきに近寄らず〉〈言わぬが花〉危うきに近寄らず、よけいなことは言わぬ。危機を予感し、よけいなことも言わぬ。〈絶体絶命〉絶体絶命を予感し、よけいなことも言わぬ。

〈飛んで火に入る夏の虫〉〈覆水、盆に返らず〉ああ、とりかえしがつかない。〈とびこ油揚げをさらわれぬ〉〈月夜に釜をぬかれぬ〉油断してさらわれた。〈きじも鳴かずばうたれまい〉〈寝た子を起す〉よけいなことをしましたね。〈とらの尾をふむ〉〈火に油をそそぐ〉危険なことをする。油断した、よけいなことをした、危険なことをした。

〈蛇に見こまれたかえる〉〈まな板のいゝもはやどろしゅうもない〉。〈一難去ってまた一難〉〈青菜に塩〉ああこまった、だめだ、しょんぼり。〈あつものにこりてなますをぶく〉〈穴があったら入りたい〉自分でも人にたいしても失敗にこりています。ああ失敗、こまった、だめだ、しょんぼり。

ああ、だめだ。

なまざまなだめだ 況を予感し、さわがぬ。

だめだ 況を先に予感しつつ、他の専門家のように自分も腹からの願いをか
なえていこう。

長い時間において自然にまかせ自分も腹から願う専門家をめざしていく。先
の縁のその上にて、

道

故郷へ錦をかざる。便りのないのはよい便りにぶじに暮しているか、い
つ成功してもどるか。所かわれば品かわる。郷に入っては郷に従え。土地
によってかわる風習を大切にしよう。それぞれの土地に暮し、いつ成功して
やるか。

むかしはいまの鏡。武士は食わねど高より。衣食足りて礼節を知る。
金は天下の回り物。ただより高いものはない。金が天下を回り礼節を知る社会
はあるか。わたる世間に鬼はなし。金が天下を回り礼節を知り鬼のいない社会
はあるか。水清ければ魚すまず。盗人の屋敷。どろぼうにも三分の道理。ど
ろぼうも十年。よんばつにもそれなりの合理性や苦勞がある。清すぎる社会
はまだないのかもしれない。江戸の天下泰平をならに清くする社会はまだ無理
か。

各地が交流する泰平なより清い社会はまだ無理か。

高みの見物。赤子の手をひねる。あごで使う。目をぬすむ。鼻であし
らう。人にかかれて行動し、人を軽くあつかう。人を軽くみて行動し、人を使
う。目から鼻へぬける。立て板に水。口も八丁、手も八丁。なめらかに話
し、仕事もてきばき。りこうな人。仕事がりこうにできそうだが人を軽くあや
ついてもいるか。裏をかく。あげ足を取る。あげ足を取ったり、裏をかいた
り。腹が黒い。足を洗う。りこうそうだがあやつったり悪かったり。りこう
そうだが高みからあやつった悪かったり。

足が棒になる。労働多くて功少く。骨折の損のくたびれもつけ。苦勞
ばかりでした。とらぬたぬきの皮算用。安物買いの銭失い。へたな売り買
い。ないそではぶれぬ。へたな売り買いや貧乏状態。苦勞ばかりやへたな売
り買いや貧乏状態。しわんぼうの柿の種。人のふんどしですもつを取る。ね
じはばをきめる。ひそかに借りたりぬすんだり。我田引水。ひそかに借りる
ぬすむ。けち。しまの自分の都合ばかりか。S.O.S.

生き馬の目を抜く。無理が通れば道理が引く。くまれっ子、世に
はばかる。なぜかにくまれっ子とか無理とかも通用する。人を見たらどろぼ
うと思え。地獄のいたも金しい。金が中心の社会かな。金、するさ、に
くまれっ子、無理が通用してしまふ社会か。

金めあてと貧乏、無理も通用する苦勞ばかりの社会か。

〈ぬれ手にあわく〉〈足が出る〉〈二束三文〉〈二束三文とく、足が出るやが。くつめに火をともしく〉風前のよもこびく運命やお金が消えそう。もっけやお金や運命にひらく。

お金と苦労と運命。

くわつてもたいくくはきだめにひるくよわつへさつた社会にもつるやたいがそれなりにある。

苦労あるお金社会のよひひひるやたいがあるか。

苦労あるお金社会から泰平なより清い社会への道はひらく。先のご縁か
いんごつじやい。

進める

〈善は急げ〉〈鉄は熱いうちに打て〉善は新しうと早うちにしなむ。〈にひ返事〉善しう新しうとむを「はら、はら」と進める。〈足元が鳥が立つ〉善しう新しうとむを「はら、はら」と鳥が立つように進める。

〈回睡をのむ〉手に汗をにぎる〈ああ心配、きんちやう、はら、はら〉どのから手が出るく立っている者は親でも使えくねこの手も借りたいくねこでも立っている親でも使いたいらほいそがしい。ああいそがしい、ああほしい。ああいそがしい、ああほしい、ああきんちやう。

善しうと新しうとむなむをきんちやうひひひ進める。

〈生兵法はだけがのもく〉風穴をあける〈将を射んと欲すればまず馬を射よ〉勝つかぶとの緒をしめよ〈確かな兵法で風穴をあげ馬から射る。そしてかぶとの緒をしめる。

〈業はく圖を制す〉けがの功名〈転んでもただでは起きぬくむしろ失敗をいかして立ちあがる。失敗も業軟にいかしてただかう。

確実に業軟にひいただかうか。

〈目の上のいびく〉手を焼くくむじもじまぐ、じまる。〈虫がこつくくまゆをひそめる〉自分勝手な人にいやな思いをする。〈手を抜く〉足を引っぱる〈非協力的な態度。組織などがうまへいかなない場合。〉鼻をあかすく組織などがうまへいかなないか。

組織なむひして確実に業軟にひいただかうか。

くひらきの引きたおしくくミイラ取りがミイラになるくひらきや先導する者が逆にめいわくになる。く火中にくりを捨つくく漁夫の利く他のためにあぶなうじつをしたら他から利益を横取りしたり。他のやううらにおいてやまやま

組織などのなまびまなやらのごにおいて確実に柔軟にごうたたかうか。
〈笛ふけどもおどらぶ〉〈二階から目撃〉〈まへいかずもどかしい〉〈雲をつかんでなをかむく〉〈まへいきませぬね〉〈鶴のまねをするからすく〉〈おかへあがったかっぱ〉〈まねして失敗したり、場ちがいでもなにもできなかつたり。〉〈やぶをつついて蛇を出す〉〈とうにもへただったたり場ちがいだったり〉。
〈馬耳東風〉〈上の空〉〈しかの角を蜂がさす〉〈聞き流し、頭に入らず、平気か〉。〈焼け石に水〉〈働きかけても効果がな〉。〈うごの太木〉〈無用の長物〉。〈どうも役に立たない〉。〈烏合の衆〉〈まとまらず役立たず〉。〈役立たず効果なし〉。
へた、場ちがい、役立たず、効果なし。ちぐはぐ。
〈砂上の楼閣〉〈もとの木阿弥〉〈もとの状態にもどろろつ。〉
ちぐはぐとかもとの状態にもどろろつ。か。
それでも、善いこと新しいことなどを着実に柔軟にごう進めるか。

「ことわざはことばのわざです。先祖の知恵です。」

日本人がこれからの世界に生きるため、ことわざがどのよう役に立つでしょうか。

「大人向けの解説」

『生きることわざまんだらよ』に用いたことわざは冒頭にも示した、『子どもことわざ辞典』とははともだち』に収録された五六三句のすべてです。この辞典の監修者である庄司和晃先生は、柳田民俗学を研究する教育学者です。わたしは庄司先生らが小学生用を選んだことわざたちをひとつの全面的な物語につづりたいと思いました。そう想ったのは、民族地理学者の川喜田二郎先生が創始したKJ法に、わたしが若いころから関心があったからです。KJ法は、「渾沌をして語らしめる」(中央公論社『KJ法』副題) 方法です。『生きることわざまんだらよ』は、わたしなりに学んだKJ法を用い、わたしなりにことわざたちをもとに予想した、日本語の世界観・社会観・人生観の編集です。あるいは日本民衆のこころの現象学でもありましようか。ことわざを生み育てた人々たちによる総合会議の代理でもありましようか。

これはまた、川喜田先生がコンピュータなどの形式検索から離れ、もうひとつの大切さを訴えた、内容検索のための試みです。自然成長した渾沌としたことわざたちを内容本位に編集し、ひとりひとりが生活の今、自分自身に必要なことわざに触れやすくする。そういう試みです。

大人の皆さんにとっても案外、ことわざという先祖からの宝が、まさに、宝の持ちぐされとなっているかもしれません。ことわざについての内容検索(つまり、これが真の情報公開なのです。)が発達していなかったからでもあります。

江戸時代以前、とくに寺子屋も発達していない地域において、教育の中心はこと

わざであったかもしれない。

ことわざは、民衆が愛着をもちおぼえやすいことばのわざとして、自然に、たとえば多く使われています。コンピュータが言語の意味を扱う際、もつとも困っているのが、たとえです。まず人間が自身の認識において、内容本位の編集の苦勞をしておくことが、コンピュータをより活すためにも、かえって賢明なのではないでしょうか。

最近、日本の情報技術などは世界の進化方向から孤立しているという意味あいにおいて「ガラパゴス」とからかわれています。情報技術はその地域の文化に接近せざるをえず、日本のことわざを研究すれば「ガラパゴス」の由来と解決方向もみえるのかもしれない。

人権思想を無理なく無駄なく拡張するには、現実論としての民俗学や民族学が必要です。わたしが私淑した、庄司和晃先生・川喜田二郎先生の両先生に感謝申し上げます。

戦前の教育勅語でもない、戦後の道徳教育回避と進学塾でもない、新しい民衆教育のはじまりを、わたしは強く祈り願っております。新しい日本の社会運営を祈り願っております。

二〇一〇年八月吉日

JOMONあかのみい

やまだ

まなぶ
学 ©

※KJ法をめぐる知的所有権は川喜田研究所（東京都目黒区碑文谷の1-1-9）が厳格に管

理しておりますからご注意ください。